

荘厳な世界を描く浄土美術の粋

良福寺の家並の中から少し小高い場所に、阿日寺が二上山を望むように建っています。二上山は古代から聖なる山、あの世とこの世の境目として信仰の対象となっていたといわれています。西方の山である二上山には落日が見られ、翌日になると東から再び日が昇るということから、再生つまり死者の魂の甦りが信じられ、優美な姿の二上山が篤い信仰が人々の心に息づいてきたのでしよう。

平安時代になって、末法思想の影響が大きくなると、西方には極楽浄土の地があるという浄土思想が人々の間に広がっていききました。そして、二上山は西方にある山、つまり浄土の山としても信仰されるようになったようです。

このような浄土信仰を確立したといわれているのが、「往生要集」を著した恵心僧都源信です。源信は香芝

えられていました。阿日寺は源信ゆかりの寺として、人々の篤い信仰に支えられてきました。「ぼ

色聖衆来迎図」は、縦九五センチ横五三・八センチで、浄土美術の粋として、重要文化財に指定されています。



所蔵:阿日寺 保管:奈良国立博物館

来迎図とは、人が臨終になった時に阿弥陀如来が二十五の菩薩を引き連れお迎えにくる様子を描いたものです。

阿日寺の図には、蓮台を捧げた観音菩薩と合掌する勢至菩薩を先頭に、光明を放つて奏楽する多くの菩薩を従えて、西方浄土から来迎される阿弥陀如来の一行の様子が描かれています。来迎する一行の人数が多いのが特徴といい、鎌倉時代中期の制作と見られています。

市の良福寺・狐井の地に生まれ、二上山の落日を見たことから、阿弥陀如来が大衆を救うためにお迎えに来られるという来迎思想を感得したと伝

つくりさん」と呼ばれ、無病長寿、安楽往生の寺として全国各地から大勢の参拝者が訪れています。阿日寺に所蔵されている「絹本著

シリーズ・まちの文化財

第六回「絹本著色聖衆来迎図」